

分布：北海道を除く全国

コマツヨイグサ (アカバナ科) 学名: *Oenothera laciniata* オエノテラ ラキニアータ

小待宵草 別名：キレハマツヨイグサ(切れ葉待宵草)，ツキミソウ(月見草)

主な生育場所

路傍や荒地、庭先、畦畔、土手、河原、海岸などの明るく乾いた場所に生育する。砂地を好み、砂浜や砂丘によく見られるが、冠水する環境には生えない。畑地内や樹園下にも見られることがある。

特徴

北米原産の外来種。生育条件によって越年草にも二～数年草にもなる。地面を這うことが多いが、斜上し草高50cmほどに達することもある。茎や葉に開出毛があり、葉は羽状に中深裂する。4月から11月にかけて、葉腋に径1～2.5cmほどの淡黄色の4弁花をつけ、しおれると黄赤色に変わる。円柱形の果実には短毛が生える。



名前の由来：マツヨイグサの花は夕方になると開き、翌朝に萎むので、宵(よい)を待って花が咲くということで待宵草。マツヨイグサの仲間の中で本種は花が小さいので小待宵草。

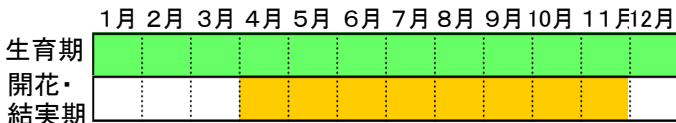
<農業との関係>

刈払いで管理される乾いた休耕地などで群落化することがある。基盤整備などで造成直後や低位置での刈取頻度が高く裸地化している畦畔にもよく見かける。耕起に弱く、よく耕されている畑地内には定着しにくい、アメリカでは不耕起栽培の普及による増加が報告されており、耕起が少ない畑や明るい果樹園下で増殖し雑草化することがある。



地面を這って広がっている株

<生活史> 関東地方の例(目安)

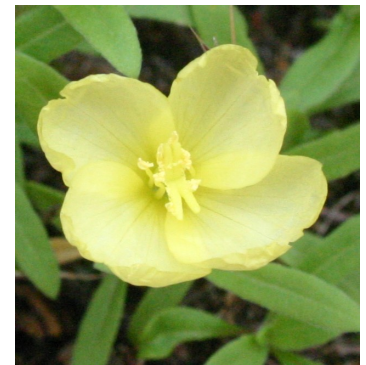


1年あたり 越年1 世代

<類似種> 日本に帰化するマツヨイグサのうち、地を這い、葉に大きな切れ込みがあり花の直径が2～2.5cmであるのはコマツヨイグサだけ。他のマツヨイグサやメマツヨイグサ、オオマツヨイグサは直立し、葉は切れこまず花の直径は3～5cmと大きい。

<一言うちく>

夜に咲くマツヨイグサの花は、主に夜行性の蛾によって受粉されています。そのため、蛾の長い口に対応し蜜腺は花の下部に伸びる筒状の部分の奥にあり、花粉はクモの糸のように繋がりが、鱗粉のためハチなどに比べて付着しにくい蛾の羽にうまく絡まりやすくなっています。



四弁花は夕方開花し、翌朝に萎む

<人との関わり合い>

美人画で有名な竹久夢二が「待てど暮らせど来ぬ人を 宵待ち草のやるせなさ 今宵は月も出ぬそうな」と詠った「宵待ち草」はマツヨイグサのこととされる。夜咲く黄色い花で夜目にもよく目立つことから観賞目的で導入されたが逃げ出し、各地で雑草化している。とくに鳥取砂丘など海浜で繁茂し、在来の植生に大きく影響を与えるため、生態系被害防止外来種に指定されている。花は夕方に摘み、天ぷらなどで食べられる。また、マツヨイグサの仲間には咳止めや健胃に効果があるとされる。

<俳句や短歌への登場>

【季語：夏】

かの母子の子は寝つらんか月見草(中村草田男) とびかかると焔の火の粉月見草(富安風生)
破船埋もれ待宵草を点す間(佐藤鬼房) 花引きて一たび嗅げばおとろへぬ少女ごろの月見草かな(与謝野晶子)
霜あれの庭にしじまり青々と待宵草のもと株ふたつ(鹿兒島寿蔵)